

White Snow

に挑む!

3/6

2 Day

3/7

氷ノ山雪山登山

70°
の雪壁を登る

一期一会がある

大山スキーマラソン

10 km
の部に出場

大自然が作り出す
素晴らしい

サングラスの向こうには
Fieldがある

人間が創造する
ルールに守られた

氷ノ山登山

1999.03.06

天候 --- 曇り / 晴れ

メンバー --- 大塚賢一 43才 田中彰 25才



「お~い、アキラ~、そっちのルートはどうや？、稜線に出れるか？、こっちはアカンわ。今、雪を踏み抜いたら、下は沢で水が流れとるわ、これ以上前に進めんわ。」と、こんな危ない会話を交わしながら斜度70度以上の雪壁を登っていく。

今週の天候は非常に不順でこの山行も金曜日の18時の天気予報で急遽決めたのもである。同行者はアキラただ一人である。いつものリーダーの加藤氏は今年になってから腰痛に悩まされていて連絡もしなかったしである。彼は、轟氏とは正反対でトレーニングのやりすぎだと思うのだが・・・、無理をしないでほしいものである。

「山の顔」は、人間と同じ四季に応じて服を着替えるし、毎日の化粧もするので同じ山を、同じコースを幾度も登っても違ったスタイルで迎えてくれている。

特にこの早春は、芽吹き前の裸の木立と雪が解け合い、紫のパステリカラーに染まり、見るもの全てが一大パノラマと化し、時には緊張もするが、この大自然と対話することによってやはり心なごむものがある。

6:50 3度、曇り。氷ノ山国際スキー場の駐車場を出発。

ドン詰まりはこの駐車場に引き込まれるようになってしまった、なんと料金は1500円と高いのには驚きである、まゝ入山料と思えばいいだろうと、自分に言い聞かせる。

登降りフトは7時半からしか動かないので、東尾根からの登山はあきらめて、氷ノ山越えからのルートで登ることにするが、登山口まで行くのにアイゼン、ワカンと装備変更で少々疲れてしまった。

8:00 晴れ。不動の滝が見える所であるが、お地藏さんが雪で埋もれてしまっていて見えない。

登山口からは今までに経験したことがない積雪である。スタート地点のトイレの小屋も屋根しか見えない。トレースはうっすらとあるものの無いに等しい。

気合いを入れ直さねばと、今一度、高度計を確認して地図にコンパスを合わせる。

何処をどう登って行こうかと、上を見上げて木々の間を縫うように両手を使い時には胸までもある雪をかきわけながら、急登の連続である。雪が重くて思うように進まないし、ワカンを履いているのでなかなか足が上がってくれない。

アキラに「この状態が1時間も続くようだったら、引き返そう。」と無理をしないように心がける。

そうこうしてもがいているうちに、「その雪壁を乗り越えたら、どうやら夏道のようなやで！」とカンを働かせると、思ったとおりであった。

しかし、「なんちゅう坂やったんや！」と二人で顔を見合わず。



8:20 0度、920m。遠くに山頂付近が見えてきた。

何と、そこだけが素晴らしく青空に照らし出されて霧氷がきらびやかに光り輝いている、何と美しい光景か！。

アキラも「早く、あそこへ行きたい」と言うがそこまでの距離は遙かかなたである。

また、新雪の深雪とは違い、重雪の深雪なので足取りは非常に遅い。

今日は、山頂に行ってから折り返して鉢伏方面に行く俗に言う「ブン回し」の予定であったが、とてもじゃないが無理である。予定はまだ未定である。

8:40 1000m、地蔵蔵に到着。

雪の量はこの屋根を見てもすごい！の一言である。1mは積もっている、よくこれだけ積もって崩壊しないと思うほどである。やはり中に祭ってあるお地蔵さんが守ってくれているのであろう。

アキラが「こんなところに熊が冬眠していたら大変やなあ〜」

9:15 1125m、小休止。

地蔵蔵を過ぎてから小さい沢を横切るのだが、なんとこの度は雪が多いせいで、完全にスノウブリッジ状態で隠れてしまっているのではないが、「アキラ〜、その下は沢やから一步一步気をつけて進めよ〜」と言ったが、雪が多いせいで大事にはいたらなかった。

白いじゅうたんを背負って、飄々としてどっしりと構えこんで座っているコシキ岩方面は、いつまでも見ても飽きない景色である。

ここまで来るのに非常に体力を消耗して、口にパンをほうばる。

しかし、体力がいる時の先行隊に馬力馬のキクちゃんが、いつもいないのは何故・・・？

10:28 3度。

小休止の後、ルートを誤って少々下ってしまったらしくてとんでもない斜度は70度以上はあろうかと思われる雪壁を200mほど登りつめて、やっと氷ノ山越えの小屋にターゲットを合わせているが、最初に高度を100m間違えたらしく、1250mでもなかなか辿り着けなかったのがルート間違いの原因であった。「反省」しきりである、もしこれがガスっていたら・・・と思うと、良い経験になった。

しかし、今までの苦労して登った甲斐があったと言っても過言ではないほどの、素晴らしいブナ林の霧氷林に出会え、また空はパステルカラーで覆われ最高のロケーションである。今シーズン最高の氷ノ山のプレゼントであろう。山の神に感謝である。

11:15 1320m、0度、無風、晴天。

氷ノ山越えの小屋より山頂に向かう稜線歩き。

ブナの巨木や巨大な杉も霧氷から樹氷に変わり、やはりここらあたりは自然の厳しさが伺える・・・今まではワカンで充分であったが、踏みしめる雪は堅くワカンは必要外である。装備変更・・・アイゼン。

11:50 甌（こしき）岩のふもとに到着。

「これ登るか?」「当然でしょう」のア・ウンの会話で即、装備変更である。

ストックからピッケルに持ち替える。下から見ているアキラは3点支持を守って軽やかに登って行く、この力量では穂高連峰のジャンダルムも可能であろうと思ったしだいである。

登り詰めて、北壁を見下ろすと、やはり雪が多いせいであろう、ちしま笹も小さな木々もほとんどが雪の下で去年より、緩やかに見えるのはやはり登山で来ている余裕であろうか・・・、ともかくここを滑りたいという気持ちがこみ上げてくる。

1400m 地点まで来ると、さすがに雪もガチガチでピッケル・アイゼンがよく食いつき最高である。

12:30 晴天、無風、4度。山頂直下の杉林で昼食タイム。

山頂小屋では早々と山スキーヤーが数人来ていた・・・鳥取側、東尾根側、そしてふと見るとあの急な流れ尾根からの10人ほどの山スキーヤーが登山者と一緒に登ってきていた、またここ近年テレマーカーが増えているが、このなるい戸倉方面や東尾根だから滑れるのであって、我々が滑るルートの北壁や流れ尾根ルートには今だシュプールを刻んだ後を見たことがない、しかしこの氷ノ山はどこでも自分に応じたコースを滑れるので最高のフィールドなのである。

今日はここまで来るのに体力もいつもより使い、またヒヤッとさせられる瞬間もありと疲れているので、東尾根方面はアプローチが少々長いので、先ほど流れ尾根方面から登って来た先行者のトレースでの下山をすることに決める。

14:00 氷ノ山国際スキー場の最終リフトに到着。

急下降斜面で「ここやろ、去年アキラが滑り落ちたところは！」と色々と思いつけり、ズボズボと股当たりまで踏み込むことしかり・・・と、いつ来てもここはとんでもない急斜面である。

リフトのおじさんに、「下りに乗せてもらえませんか？」「アカン、そのゲレンデの端を降りて・・・」と言うのである、融通のきかんオヤジであった。ゲレンデはガラガラなので悠々と坪足で穴をあけながら下って降りたしだいである。

スキーヤーには我々は、どうゆうふう映っていたらうか・・・？

14:50 登降リフト到着。

ここからは、駐車場までリフトで降りられるのである。

今日は本当に今シーズンで最高の氷ノ山の日だったと思うしかりである。

~~~~ このまばゆいばかりの氷ノ山にカンパイ！~~~~

#### 後記

いついかなる場合でも、急遽予定を変更出来るルートを確認し、山に対する余裕というものが必要であると、勉強になった一日でもあった。



# 大山チロルの里スキーマラソン

1999.03/07

大塚賢一

----- 天候 -----

雨

----- メンバー -----

選手 --- 大塚賢一 43才 大塚貴司 19才 木倉博 35才 木倉恵美子 33才  
田中彰 25才 白岡昌也 44才 小西雅美 29才  
応援 --- 大塚ちか子 大村愛弓 木倉ミキロウ 田中友美 & 母

----- まえがき -----

昨日とうって変わっての天候で朝からあまり乗り気なかったのが、我が息子の貴司も意気揚々に参加するし、また愛妻ちか子姫もこの悪天候の中を応援してくれるとあっての参加であった。コースは、一周 5km の周回である。

----- おっさんの遊びやな -----

現地に着くまでに、すでに雨は降って気温も 1 度で非常に冷たい氷雨である。



当然の事ながら視界も悪い、最初からあまり乗り気がしなかった上に悪天候が二乗に重なって戦意消失である。しかし、受付時間も迫ってきて気合いを入れ直して寒い中を着替えて、簡易防寒着(ゴミ袋)を作ってスキー板の点検に行く。

そこでは何と、彰の板でもスタッフに「あれっ、これウロコが付いている」と変な顔をされたそうである。私の板はそれにまだエッジも付いていて幅も広くて何を言われるのか？と置いていたら私の顔を見て「こんな板でおっさんの遊びやな。」てな顔をして何も言われなかったのが妙に頭の角に残っていた。現に小学生も含む選手の中にも私みたいなごつくるしいブーツや幅広の板はだ～れもいなかった。

----- ワックスサービス -----

点検のすぐ横では本格的に「ワックスサービス」のテントが設けられて、フリースタイルの板に電気アイロンでワックスを今日の雪質に合わせてトップ、センター、テールと使い分けてサービスしていた。当然私のような板にはワックスを塗るところが無いので「ふ～ん、ああするのか」と、見るもの見るもの初めてで非常に新鮮で驚きの連続であった。しかし、あんなワックスは我々の兵庫県では売っていない。

----- 逆八の字走法 -----

また、選手の練習しているさまは、テレビで見ると同じで「逆八の字走法」で見事にスピードに乗って板を滑り込ませている、それも小学生である。ホントに驚きの連続であった。

----- スタート -----

カウントダウン・・・10.9.8.7.6.5.4.3.2.1 10:30、自衛隊の大砲の空砲の轟音とともにスタートである。

スタート地点では最前列が 30km の選手が 11 名、15km に我らがキクちゃんを含む 36 名、そして、我々の 10km の部と一般女子、中学男子を含む 95 名、その後に中学女子、小学男子・女子の 5km の部の 78 名、最後尾は 6km の歩くスキーの部の 85 名の合計 305 人のエントリーで一斉スタートである、しかしこの冷たい雨のために不参加の人も多々いるであろう。

----- ゆっくり雪ましよう -----

スタート模様としては、本当に一昔前のトリアスロンのレースのような和気藹々とした和やかな雰囲気を楽しめる雰囲気である。よ～し、今日はみ

んなに「ゆっくり雪ましよう」とアドリブを噛ますが、彰はカウントダウンが始まると「緊張してきた」と言って気合いが入ってきた様子である。やはり、私も号砲が鳴ると、反射的にか「よ～し！」と気合いが入り「我らがXC走法」で「逆八の字走法」に負けてなるものかと、勢いだち抜かし、抜かされつつの攻防で前へ、前へと行くが、そこは現地の子供達も慣れている様子で、小学生にもどンドン置いて行かれるしまつであった。

#### ----- 小学生と競り合う -----

第一コーナーの登りで、キクちゃんがあくせくしている間に難なく抜きさり我らのメンバーとはどンドンと差をつけて行くが、やっぱり前には小学生がうようよして、下りで「君らは速いなあ～」と言うと「おっちゃん、変わった板やね～」と言われるしまつであったが、登りにさしかかると持ち前の持久力で抜きさるが、やはり下りになるとまた追いつかれの攻防の繰り返しであった。小学生と競り合うのは生まれてこのかた初めてである。

#### ----- 転倒する者続出 -----

きつい登りでは心拍数もすでに180は回っているであろう、必死の形相で前にいるパテている者をどンドンと抜いて行く、急な下りも峰山の山頂からの斜度以上はありコーナーも鋭角に曲がっていて雪も堅く、コントロール不能で転倒する者続出で、コース上では全然気合いを抜けない。

#### ----- 10kmを30分を軽く切る -----

2周目の3kmを過ぎるころ、後ろから板の滑る音が長く聞こえる・・・ま



さか？と思っていたら、30kmの赤ゼッケンがすごいスピードで抜きさって行った。何と！、私が5kmを走破していないのに彼らは早から10kmの地点にさしかかろうとしている。

なんという速さなのか？、考えてみれば彼

らは10kmを30分を軽く切るのだから当然であるが、トップとはこんなにも差が開くものなのかと驚くやら感心するやらである。

#### ----- 後記 -----

寒さに震えて協力して下さるエイドのお嬢さんたちに笑顔で挨拶をし、ゴール地点で迎えて下さるスタッフ達に「今日はこの悪天候の中を遊ばせていただきまして、どうもありがとうございました(雪山では完全にビバークである)」と、お礼の言葉を交わし、無事に55分ほどでゴール出来ました。ちなみに、「よく、この歩くスキーでこのタイムが出せましたね！」と誉めてもらったのが妙に照れくさかったです。

初レースですべてのものが、新鮮に写り私にとって良き人生の一ページに刻むことが出来ました。

ちなみに、我々のメンバーで転倒しなかったのは、私と、あの峰山ではよく転んでいた貴司だけでした。

#### ----- お礼の言葉 -----

この度の運営に当たっては、スタッフの皆さんには、本当にあの悪天候であるのに炊き出しなど、おまけにエイドまでも設けての運営には感謝するしだいで。これで、エントリー費が¥3000は、格安です。